

## ハングル漢字音注概説

### 1. ハングルとは

ハングル（諺文）の正式名称は「訓民正音」、世宗（在位 1419-1450）と当時の文臣官僚たちが討議の末に作り上げた表音文字である。世宗 25 年（1443）に制定され、その 3 年後に公布された。制定者と年代を知ることができる文字というのは世界でも類例がない。

訓民正音ではまず基本となる 17 の子音字と 11 の母音字が定められた。子音字はその音を発音する時の調音器官の形を象徴的に表したもので、同じ調音器官の音に対しては形の似ている文字が当てられる。母音字は、天を表す「・」、地を表す「一」、人を表す「丨」の組み合わせによって作られている。朝鮮語の一音節は一般的に CVC（子音+母音+子音）の形をとるので、それぞれを「初声」・「中声」・「終声」と呼ぶ。訓民正音制定時に用いられていた文字は、複合子音・複合母音を含めると初声が 39 種、中声が 25 種、終声が 36 種であり、原理的には 36,075 種類の音節を表記できることになる。

### 2. 諺解本の体裁

#### (1) 漢字音注と朝鮮語訳

ハングルは、もともと朝鮮語を書き記すために作られた文字であるが、他の言語の発音を表記する場合もあり、当然ながら漢字の音を表すことにも応用されている。ここでは崔世珍（1467-1543）による『老乞大』最古の諺解本である『翻訳老乞大』（1517 年以前）をテキストとして諺解本の一般的な体裁を見てみる。〈図版①参照〉

当時編纂された中国語会話教科書には漢字だけを用いた「漢字本」と、ハングルによる注解を加えた「諺解本」がある。諺解本では、まず漢字本文が大字で示され、その一字ごとにハングルで二種類の漢字音を記すとともに、「○」の記号でフレーズを区切り、その後小字双行で朝鮮語訳を挿入するというスタイルを取る：

A：ハングルによる二種類の漢字音

B：漢字ハングル交じり文による朝鮮語訳

B の部分は「中期朝鮮語」と呼ばれる 500 年ほど前の朝鮮語なので、現代語の知識だけで読むには限界がある。以下では当面の課題である A の部分だけを対象とする。

#### (2) 二種類の漢字音

A の部分には当時学ぶ必要があった二種類の漢字音が記されており、右側に記されたものを右側音（右訳音）、左側に記されたものを左側音（左訳音）と呼ぶ習慣である。それぞれが表す字音の違いについて、崔世珍は、左側音の方は申叔舟（1417-1475）が『四聲通攷』という韻書の中で示した「俗音」を転載したものであり、右側音の方は自身が採取した当

時の「正音」を朝鮮語の表記方法によって記したものと述べている。両音の性質については諸説あるが、一般に左側音は中国語の表記法に基づく伝統的な字音、右側音は朝鮮語の表記法に基づく口語的な字音であると考えられている。

### 3. ローマ字転写

朝鮮資料によって当時の漢字音の問題を考える際には、便宜的にハングルをローマ字に変換（転写・翻字）する。その方法は河野六郎（1947）によるのが一般的である。ただし、これはあくまで機械的に文字を置き換えたものなので、ローマ字が表す音はあくまで近似値に過ぎないこと、朝鮮語の発音も時とともに変化しているから、現代語の発音と必ずしも同じではないことに注意。〈図版②参照〉

一音節は初声→中声→終声の順に発音されるので、転写をする際には「左→右」、「上→下」または「左→右→下」の順でハングルにローマ字を当てはめていけばよい：

①②	①	①②
	②	③

### 4. 声点

#### (1) 声点とは

漢字音注に見られるハングルの左側には、所々に傍点がついており、これを「声点」という。声点は本来中期朝鮮語の高低アクセントを表す記号であるが、これを中国語の声調を表す手段として用いたものである。声点が表す意味は左側音と右側音とで異なっている。

#### (2) 左側音の声点

左側音に付された声点は中国語の調類、つまりその字が古典中国語における四声（平・上・去・入）のうちどれに帰属するかを示したものである。声点と対応する四声、及びその転写は以下の通り：

声点	四声	転写
無点（ ）	平声	ga
一点（・）	去声／入声	gǎ/gǎg
二点（：）	上声	gā

一点には去声と入声の二つが対応しているが、このうち入声は促音（つまる音）を示す終声が付されることによって去声と区別される仕組みである。

#### (3) 右側音の声点

一方、右側音に付された声点は、これを朝鮮語のアクセント記号として見た場合にその字がどのような調子で発音されるかを示したものである。声点と推定される朝鮮語アクセントの対応関係は以下の通り：

声点	朝鮮語アクセント
無点 ( )	低く平ら
一点 (・)	高く平ら
二点 (：)	低から高へ

朝鮮語のアクセント体系を援用することによって中国語の声調を表す方法は崔世珍の創見である。なお、表される声調の種類が三つしかないのは、当時の朝鮮語がアクセントを三種類までしか区別できないためであって、必ずしも当時の中国語が三声調体系であったことを意味するものではない。

声点によって中国語の声調を表記したテキストは『翻訳老乞大』及び『翻訳朴通事』のみであり、『老乞大諺解』（1670）以降の諺解本には受け継がれていない。

<この項の参考文献>

韓国學文獻研究所（1980）『原本老乞大諺解（全）』ソウル：亞細亞文化社（國語國文學資料叢書）。

河野六郎（1947）「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『Tôyôgo Kenkyû』2；河野六郎（1979）『河野六郎著作集』1：96-97。東京：平凡社。

河野六郎（1951）「諺文古文獻の聲點に就いて」『朝鮮學報』1：93-140；『河野六郎著作集』1：407-445。

中村完（1961）「『朴通事 上』の漢字の表音について」『朝鮮學報』21/22：532-566；『訓民正音の世界』：235-263。

—この項目は竹越孝が担当しました



## 朝鮮語ノ羅馬字轉寫案

### 母音

ㅏ a	ㅓ e	ㅗ o	ㅜ u	ㅡ y	ㅣ i	ㅑ a(e)
ㅓ ia	ㅕ ie	ㅛ io	ㅠ iu			
ㅑ oa	ㅕ ue					
ㅓ ai	ㅕ ei	ㅑ oi	ㅕ ui	ㅓ yi		ㅑ ai(ia)
ㅓ iai	ㅕ iei	ㅑ ioi	ㅠ iui			
ㅑ oai	ㅕ uei	ㅑ ioa	ㅕ iue			

### 子音

ㄱ g	ㅋ k	ㄲ gg	ㅇ ng	
ㄷ d	ㅌ t	ㄸ dd	ㄴ n	ㄹ r
ㅂ b	ㅍ p	ㅃ bb	ㅁ m	
ㅍ v	ㅍ f	ㅃ vv	ㅁ w	
	ㅅ s	ㅆ ss	ㅈ z	
	ㅅ š(sh)	ㅆ šš(ssh)		
	ㅅ s	ㅆ ss		
ㅈ j	ㅊ c	ㅉ jj		
ㅈ j	ㅊ č	ㅉ jj		
ㅈ j(dz)	ㅊ c(ts)	ㅉ jj(ddz)		
ㅊ h	ㅊ h	ㅉ hh	ㅇ ‘	ㅊ ‘